



大江健三郎の「飼育」とウィリアム・フォークナー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学 現代システム科学研究科 現代システム科学専攻 言語文化学分野 公開日: 2025-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 相田, 洋明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/0002002728

大江健三郎の「飼育」とウィリアム・フォークナー

相田 洋明

小論の目的は、大江健三郎の「飼育」を題材に大江とウィリアム・フォークナーの関係について考察することである¹。

大江は1958年1月『文學界』に短編「飼育」を発表し、同作で7月に芥川賞を受賞した。「飼育」は、戦時中、谷間の村の森にアメリカの飛行機が墜落し、落下傘で脱出した黒人兵を村で保護監禁する話で、少年の「僕」を語り手に物語は進行する。村の人々は、町を通して県庁からの指示を待っている。そして、物語全体としては、さらにその県庁を通して、戦争を遂行している国家が垣間見える構造になっている。

「飼育」は、大江のキャリアにとって極めて重要な作品である。というものの、それまでは「奇妙な仕事」や「死者の奢り」といった東京の大学生の体験を描く短編を発表していた大江が、ここで初めて、谷間の村と、町・県・国家の対立を構造的基礎とする作品を書き上げたからである。このことについては大江自身も自覚的で、後年このように語っている。

私の文学生活をふりかえりますと、それはごく初期のうちから、日本列島の一つの島、四国のほぼ中央の、四国山脈の分水嶺すぐ北側の深い森のなかにある、小さな谷間の集落を小説の舞台にしています。最初は、まだ若い作家の頭の中に予感的な機能が働いたのだ、というほかありません。やがてそれが、自分の小説群の大きいかたまりの一部になる、という見通しはなにもないままに、私は生まれ育った集落について書き始めたのです。

それは『飼育』という短篇小説でした。(中略)

この短編が、私の文学生活において決定的な意味を持つのは、(中略) 根本的に、この短編の描いている想像宇宙の、「構造」と「場所」によってなのです。

この場所の地形学的な特徴が、実際に私の生まれ育った森の中の谷間の集落トポグラフィックに似ているということは確かです。しかし、より重要なのは、この短篇を書いてから、私にとって故郷の風景はうしろにしりぞいて、小説の中の地形学が前面に出て来た、ということなのです。

四国の山間にある現実の私の村は、むしろこの短編を書いたことで、「無化」されたのです。そして私にとっては、この小説に描かれている創造宇宙こそが、生なましりリアリティーと、神話的かつ民話的な構造において、そのあとに居坐ることになったのです。(「小説の神話宇宙に私を探す試み」13-14)

長い引用になったが、この引用は後にもう一度参照する。

さて、「飼育」の文体や動物表象については、フランスの作家ピエール・ガスカールの『けものたち・死者の時』の、また監禁状態というテーマについてはサルトルの影響がすでに指摘されている。しかしここでこだわりたいのは、兵士が黒人であるという点である。

第二次大戦において、黒人の空軍パイロットは、ヨーロッパ戦線では存在したものの、太平洋戦線では存在しなかった。したがって黒人パイロットという設定は歴史的な事実には反するのだが、この点について大江自身は「九州の山間地で、爆撃機からパラシュートで降下した黒人兵が、農民たちに殺された」という集落で語られていた民話にもとづくとしている(「小説の神話宇宙に私を探す試み」14)。それは一面の真実なのであろう。また、大橋健三郎は「黒人兵という、アメリカの複雑な人種問題をどこかに暗示する人物の設定」について「この作品の世に出た一九五七年(ママ)とは、五四年のアメリカ最高裁判決に基づく人種分離教育撤廃の運動と、それに伴う騒乱が急激に高

まりつつあった年であることを想起されたい」と同時代のアメリカの状況との関わりの可能性を指摘している（大橋153）。

さらに、柴田元幸は「大江健三郎による創造的『ハック・フィン』訳」と評しても、マーク・トウェインにも大江健三郎にも失礼にはならないだろう。少なくとも、「黒人兵」が「白人兵」だったらこの物語は成り立たない。」と兵士が黒人であることの決定的な重要性をあらためて確認しながら、マーク・トウェインの影響を示唆している（柴田89）。

しかし、ここではもう一つの別の可能性を考えてみたい。すわわち、大江が傾倒していたサルトルが早い時期に論じ、そして影響を受けたと思われるアメリカの作家ウィリアム・フォークナー——サルトルは1930年代終わりにフォークナーの作品を論じた2つの論文を『新フランス評論』に発表して、フランスでのフォークナー評価に先鞭をつけた——の作品と比較してみたい。実際、大江自身が作成に協力した大江の年譜においても1955年の項に「アメリカ文学はノーマン・メイラー、フォークナー、ソール・ベローなど」を愛読するとある（篠原177）。

ウィリアム・フォークナーは、1897年に生まれたアメリカ南部の作家で、自らが生まれた土地をモデルにして、ミシシッピ州に架空の郡ヨクナパトーフアを設け、そこに物語の場所を限定して、人物を複数の小説にわたって登場させながら、アメリカ南部社会の過去と現在を膨大な作品群で分厚く描く、いわゆる「ヨクナパトーフア・サーガ」を書いた作家である。そしてアメリカ南部作家として当然のことながら、黒人たちがしばしば作品に登場する。

さて、大江の「飼育」にもどり、黒人兵が初めて語り手の「僕」の前に姿を現す場面を読んでみよう。

大人たちは冬の猪狩の時のように重おもしろく唇をひきしめて《獲物》を囲み、殆ど哀しげに背を屈めて歩いて来るのだった。そして《獲物》は、灰褐色の絹の飛行服を着こみなめした黒い革の飛

行靴をはくかわりに、草色の上衣とズボンをつけ、足には重そう
で不格好な靴をはいていた。そして黒く光っている大きい顔を傾
けて昏れのこる空をあおぎ、びっこをひきながら足を引きずって
来る。《獲物》の両足首には猪毘の鉄ぐさりがはめこまれていて、
それが騒がしい音をたてていた。《獲物》を囲む大人たちの行列
の後に続いて、僕ら子供たちはやはり黙りこんで群がりながら歩
いた。行列は分教場の前の広場までゆっくり進み、静かに止まっ
た。僕は子供の群がりをかきわけて前へ進み出たが、集落長の老
人が声をはりあげて僕らを追いちらすのだった。僕らは広場の隅
の杏の樹立の下まで後退し、そこで頑強に踏みとどまると、濃さ
を増す暗がりを透かして大人たちの会議を見守った。(中略)

大人たちは再び黒人兵を囲んでゆっくり引きかえし始め、僕ら
は間隔をおいて、その黙り込んだ行列について行った。《獲物》
を囲む行列は倉庫の横側の荷物積出口の前にとまった。そして、
そこには、(中略)地下倉が、黒ぐろと降り口を開いて動物の住
む穴のように見えるのだった。黒人兵を囲んだまま大人たちは儀
式の始まりのように莊重にそこへ沈みこんでいき、大人の腕の白
い揺らめきが厚い揚蓋あげふたを内側から閉ざした。「飼育」130-31)

このシーンについてスーザン・ネイピアは、「莊重な雰囲気の大人たちと黙りこくった子供たち、鎖に捕らわれた長身の、孤立した男、そして、行列全体をつつむ恐怖の感覚は「儀式のいけにえ」のイメージを喚起する(“the entire tableau itself—the following of solemn adults and silent children, the tall, isolated man in chains, and the sense of fear that surrounds the entire procession—evokes images of ritual sacrifice” (Napier 20))」と述べている。実際大江のテキストにも「儀式の始まりのように」という表現が用いられている。

さて、フォークナーの代表的な短編の一つで1930年に発表された“Red Leaves”「赤い葉」に、これとよく似た状況が現れる。ただしこちらは比喩ではなく、文字通り、儀式のいけにえ、すなわち、ネイ

ティブ・アメリカンのチカソー・インディアン部族の首長の死に伴い殉死させられる黒人奴隷の姿である。この黒人奴隷は死んだ首長のそば仕えを務めていて、いま仕えていた首長が死んだので部族の習慣に従い殉死を求められている。黒人奴隷はいったんは逃亡するが、捕えられ殉死の場所へと歩かされている。そのシーンを読んでみよう。原文に続けて、日本で最初のフォークナー研究書を「飼育」が発表されたのと同じ1958年に出版した、高橋正雄氏の翻訳を付しておく。

... and Issetibbeha's body had already been removed to where the grave waited, along with the horse and the dog, though they could still smell him in death about the house where he had lived in life. The guests were beginning to move toward the grave when the bearers of Mocketubbe's litter mounted the slope.

The Negro was the tallest there, his high, close, mud-caked head looming above them all. He was breathing hard, as though the desperate effort of the six suspended and desperate days had catapulted upon him at once; although they walked slowly, his naked scarred chest rose and fell above the close-clutched left arm. He looked this way and that continuously, as if he were not seeing, as though sight never quite caught up with the looking. His mouth was open a little upon his big white teeth; he began to pant. The already moving guests halted, pausing, looking back, some with pieces of meat in their hands, as the Negro looked about at their faces with his wild, restrained, unceasing eyes. ("Red Leaves" 339)

そこで、イッセティツベハの死体は馬や犬といっしょに、墓の用意された場所にすでに移されていた。もっとも、死体がそこに移されたあとも、人びとには、彼が生前生活していた家のまわり

で、死んだ彼の臭いを嗅ぐこともできたのだが。客たちはモケチュッベの担架のかつぎ手が坂をのぼってきたころには、墓地に向かって動きはじめていた。

一行のなかでは黒人がいちばん背が高く、その高い、髪を短く刈った、泥のこわばりついた頭が、だれよりも高く上につき出していた。あたかも逃げのびていた死に物狂いの六日間の、死に物狂いの興奮の疲れが、いま一度におそいかかりでもしたように、黒人は荒く息をはずませ、一行はゆっくり歩いているのに、そのむき出しの傷だらけな胸は、左の腕できつくつかんでいたにもかかわらず、はげしく上下にはずんでいた。彼はたえずあちらこちらに眼をくれていたが、なにも見てはいないようであり、視力がみることに追いつかないようだった。口はすこし開いていて、大きな白い歯がのぞきやがて喘ぎはじめた。すでに動き出していた客たちは、黒人がその狂ったような、ぐっとこらえた、たえず動いている眼で彼らの顔を見まわすと、立ち止まってひと息つき、うしろを振り返ったが、そのうちのいく人かは手に肉の切り身を持っていた。(「赤い葉」46-47)

「飼育」と「赤い葉」に共通する「儀式のいけにえ」のように歩かされる黒人表象とともに、どちらの作品でも死のにおい、死者や墓地の描写があふれていることにも注目したい。今引用した「赤い葉」の前半部分で、死んだ首長のイッセティッベハの死体と墓地が言及されているが、同じように「飼育」にも死者と火葬場が繰り返し描出される。「飼育」の冒頭の一文と、末尾の段落を引いておこう。「僕と弟は、谷底の仮設火葬場、灌木の茂みを伐り開いて浅く土を掘りおこしただけの簡潔な火葬場の、脂と灰の臭う柔らかい表面を木片でかきまわしていた。」これが作品の出だしで、「僕は子供たちに囲まれることを避けて、書記の死体を見すて、草原に立ちあがった。僕は唐突な死、死者の表情、ある時には哀しみのそれ、ある時には微笑み、それらに急速に慣れてきていた。村の大人たちがそれらに慣れているように。黒

人兵を焼くために集められた薪で、書記は火葬されるだろう。僕は昏れのこっている狭く白い空を涙のたまった眼で見あげ、弟を捜すために草原をおりて行った。」が最後の段落である。町からは隔絶された村にも戦争の死の影が迫っているわけである。

これ以外にも、アジア系に属する民族（日本人とネイティブ・アメリカン）が長身の黒人を取り囲んでいる図柄も共通していると言えよう。（「飼育」においても引用した部分の直前に「黒い大男」という表現がある。）

さらに、黒人が飲み、食べるシーンを比較してみたい。

しかし、黒人兵はふいに信じられないほど長い腕を伸ばし、背に剛毛の生えた太い指で広口瓶を取りあげると、手もとに引きよせて匂いをかいだ。そして広口瓶が傾けられ、黒人兵の厚いゴム質の唇が開き、白く大粒の歯が機械の内側の部品のように秩序整然と並んで剥き出され、僕は乳が黒人兵の薔薇色に輝く広大な口腔へ流しこまれるのを見た。黒人兵の咽は排水孔に水が空気粒をまじえて流入する時の音をたて、そして濃い乳は熟れすぎた果肉を糸でくくったように痛ましくさえ見える唇の両端からあふれて剥き出した喉を伝い、はだけたシャツを濡らして胸を流れ、黒く光る強靱な皮膚の上で脂のように凝縮し、ひりひり震えた。（中略）

黒人兵は広口瓶を荒あらしい音をたてて籠に戻した。それからは、もう彼の動作に最初のためらいはなかった。握り飯は彼の巨大な掌に丸めこまれて小さい菓子のように見えたし、干魚は頭の骨ごと黒人兵の輝く歯にかみ砕かれた。僕は父と並んで壁に背を支え、感嘆の感情におそわれながら、黒人兵の力にみちた咀嚼を見守っていた。（「飼育」138）

They brought food and watched quietly as he tried to eat it. He put the food into his mouth and chewed it, but chewing, the

half-masticated matter began to emerge from the corners of his mouth and to drool down his chin, onto his chest, and after a while he stopped chewing and sat there, naked, covered with dried mud, the plate on his knees, and his mouth filled with a mass of chewed food, open, his eyes wide and unceasing, panting and panting....

...

“Wait,” the Negro said. He dipped the gourd again and tilted it against his face, beneath his ceaseless eyes. Again they watched his throat working and the unswallowed water sheathing broken and myriad down his chin, channeling his caked chest.... Then the water ceased, though still the empty gourd tilted higher and higher, and still his black throat aped the vain motion of his frustrated swallowing. A piece of water-loosened mud carried away from his chest and broke at his muddy feet, and in the empty gourd they could hear his breath: ah-ah-ah. (“Red Leaves” 340-41.)

人びとは食物を持ってきて、黒人が食べようとするのを静かに眺めていた。彼は食物を口に入れて噛みだしたが、噛んでいるうちに、半分噛みくだかれた食物が口の隅からこぼれだし、顎あごから胸までたれて流れ、しばらくすると噛むのをやめて、裸で、乾いた泥にくるまって、膝に皿を乗せたままそこにすわっていたが、ぐじゃぐじゃに噛まれた食物のいっぱい詰まった口を開け、眼はぐっと見開かれて動きつづけ、はあはあと喘ぎつづけていた。(中略)

「待ってくんな」と黒人はいった。彼はもう一度ひょうたんを井戸にひたし、それを顔に、動きつづけている眼の下に近づけ、かたむけた。とふたたび、人びとは彼の咽喉の動くのを、飲みそこねた水が砕けながらざっざとその顎あごにこぼれ、泥のこわばった

胸を流れていくのを眺めていた。(中略)すると水の落ちるのがやんだが、からのひょうたんはまだいよいよ高かたむけられ、そして黒人の黒い咽喉は無駄な飲む動作をまだ空しく繰り返しているのだった。水のために泥のひとかけらが彼の胸からはがれ落ちて、その泥だらけな足もとでこわれ、すると空っぽのひょうたんのなかでアー、アー、アーとうなっている彼の息づかいが人びとの耳に聞こえた。(「赤い葉」47-50)

衆人環視のなか、まるで犬のように与えられた食べ物をむさぼり口からあふれさせる黒人二人。絶望的な状況に置かれた彼らを見つめる視線の質には、両作品でとても似かよったものが感じられるのではないだろうか。

さらに、「飼育」における村と町・県・国家という対立軸と同じように、「赤い葉」においてもネイティブ・アメリカン部族と白人社会・国家が対立軸におかれ、作品構造でも共通点が見出せる。されにもう一つ付け加えるなら、「赤い葉」の姉妹編とも言うべき、イッセティッベハの祖先の姿を描いた“A Justice”(「正義」という短篇は少年の語りで語られ、少年の成長物語としても読める構成になっている。この点「飼育」と共通する。(ちなみに、“Red Leaves”も“A Justice”も、1946年に出版された*The Portable Faulkner*というフォークナーの作品選集に収められている。)以上、「飼育」とフォークナーの「赤い葉」を比較した。ある程度の類似性はいいだせるのではないだろうか。

実際大江は、安岡章太郎との対談で「飼育」の創作プロセスを説明する際、イメージという言葉キーワードとして用い、フォークナーに言及している。

外国の新しい小説を読んでいると、直接それと関係はないのに僕の世界にとつぜん新しい光があらわれてくる。夕暮、子どもが、落下した飛行機の尾翼に乗って、草原を滑ってくるとい

うようなことがあらためて新しい光をおびて僕をとらえる。(中略)すると僕は本を読むのをやめて、小説を書こうとした。そうした形で僕は外国文学の影響を受けた。『飼育』のいちばん最初のイメージは黒人の問題でもなんでもない、谷間の底のほうで死人を焼いていて、そのために村の人間が出て行って奉仕して、薪を作っている。それを見おろす谷間の斜面で夕暮、子供らは、こわれた尾翼で滑ってくる。そのうち、ひとりがとつぜん岩に頭をぶっつけて、死んでしまうという、そういうイメージというか、そうしたものだけで出発するわけですね。(中略)

だいたい僕はそういうイメージから出発して小説を書くタイプで、黒人と日本人とを思想的に対位してひとつの小説を書こうとかいうことではじめる、絵解き式に小説を書くというタイプではないのです。ある本質に根ざしたイメージを小説にむかってふくらませていくことしか僕にはできない。(中略)フォークナーのインタビューを読むと『響きと怒り』という小説は、ある日、窓から眺めていたら、木登りしてくる女の子の、下着の尻が汚れているのが見えるというイメージから小説を書きはじめたと言っているのですね。あの小説を読むと、たしかにひとりの女の子が木をつたわって降りてくる、その汚れた下着といったイメージの底に含まれた、一種の近親相姦的な魅力、あるいは反発感とかいうような感じが柱になっている。本質的にはそのイメージのみで成り立っているところがある。すくなくともそういうフラッシュみたいに、過去の思い出のなかからひらめいてくるイメージから出発する小説家というものがあって、僕は自分がそのタイプであると思います。(「われわれはなぜ書くか」26-28)

ここで大江は「『飼育』の最初のイメージは黒人の問題でもなんでもない」と強く否定し、さらに後にもう一度「黒人と日本人とを思想的に対位してひとつの小説を書こうとかいうことではじめる、絵解き式に小説を書くというタイプではない」とあらためて否定したうえで、

フォークナーに言及している。フォークナーへの言及に向かってゆく話の流れはイメージというキーワードを媒介にしてごく自然である。しかし、先にふれたようにフォークナーはアメリカ南部を描いた作家で黒人の登場人物が多く登場する。実際大江が言及している『響きと怒り』でもディルシーという黒人女性が大きな役割を果たしていて、その他にも黒人の登場人物は多い。ひょっとしたら、「黒人」という言葉が連想を生んで、ここでフォークナーを導き出しているのではないか、フォークナーの黒人（例えば「赤い葉」における黒人）と「飼育」の黒人にはやはりどこかつながりがあるのではないかと想像をたくましくしたくなる場所である。

さて、以上「飼育」と「赤い葉」を比較し考察した。もちろん以上の考察から、大江とフォークナーの影響関係が跡付けられるわけではない。ただ、影響関係があったにせよ、あるいは、偶然だったにせよ、「飼育」に黒人が現れること自体に未来を予兆する象徴的な意味があったように思われる。というのも、この後大江は、谷間の村と国家の対立を基軸とする作品群を創作してゆくことになるが、それは構造的に、フォークナーのヨクナパトーフア・サーガと極めて近いものだからである。最初の引用に現れる「想像宇宙の、「構造」と「場所」^{トポグラフィック}」、^{トポグラフィック}「場所の地形学的な特徴」また、「小説の中の地形学」といった表現は、まさにヨクナパトーフア・サーガを説明する言葉としてもぴったりである。

大江の作品群とヨクナパトーフア・サーガの類似性については、多くの論者が指摘しており、ここでは詳述はしない。むしろここで指摘したいのは、大江のヨクナパトーフア・サーガへの言及の乏しさなのである。このことに気づいているのは私だけではなく、たとえば大橋健三郎もこう述べている。

これは傍白の形で言うのだが、いったい大江には、フォークナーの作品に読み耽ったという批評家の証言や、この「作家自身にとって文学とは何か？」にも「僕は、この数週間、もっぱらフォーク

ナーを読んでいた」という直接の証言があるにもかかわらず、フォークナーを主題としたエッセイは、私の知っている限り最近までまったくなかった。彼は去る昭和五十六年五月半ばの日本英文学会第五三回大会で「日本の作家から見たフォークナー」いう演題で講演したが、これがおそらく大江の最初の本格的なフォークナー論であろう。(大橋 212)

そしてこの講演「日本の作家から見たフォークナー」のテーマは「フォークナーにおける女性的なもの」で扱っている作品は主として「スノーパス三部作」である。また、大江はフォークナーの“between grief and nothing I will take grief”（「悲嘆と無のあいだで私は悲嘆をとろう」）をよく引用するが、これは『野生の棕櫚』という小説に現れる言葉である。つまり、大江はフォークナーのヨクナパトーフア・サーガの中心的な作品であり、かつ、フォークナーにおける根源的なテーマ、すなわち、アメリカ南部の歴史と人種問題を正面から扱った、『アブサロム、アブサロム!』、『八月の光』、『行け、モーセ』といった作品にはまったく言及しない。また、ヨクナパトーフア・サーガが自らの「谷間の村」をテーマにした作品群と似通った構造をもつことについてもいっさい触れた文章はない。

この言及の欠落については、いわゆる影響の不安ということが考えられるかもしれない。しかし、ここでは大江がデビューした頃の日本社会の状況からの影響を考えてみたい。大江自身、「飼育」を発表したのと同じ1958年に出版した『見るまえに跳べ』の「後記」で「私はこの創作集におさめた作品をつうじて一つの主題を展開したいと考えました。強者としての外国人と、多かれ少なかれ屈辱的な立場にある日本人、それにその中間者としての存在（外国人相手の娼婦や通訳など）、この三者の相関をえがくことが、すべての作品においてくりかえされた主題でした。」と述べている。フォークナー訪日の年1955年²に大江は小説を書き始めた。征服者としてのアメリカ、そのアメリカ人が書いたアメリカ文学に対する複雑な思いがあったのではないか。

例えば、フランス文学の影響を公言するようには、アメリカ文学の影響を公言することを妨げる心理的・社会的状況があったのではないだろうか。

本稿は、日本比較文学会第54回中部大会（2023年5月27日於中京大学名古屋キャンパス）のシンポジウム「ウィリアム・フォークナーの日本訪問余滴——冷戦期文化外交と日本人作家」（登壇者は金澤哲京都女子大学教授・森有礼中京大学教授・相田）における私のパート「大江健三郎の「飼育」をめぐって」の発表原稿に基づく。発表の機会を与えてくださった日本比較文学会中部地区の皆さんに感謝します。

注 1 本論に入る前に大江とフォークナーをめぐるトリビアを三つ紹介したい。

さて、僕はこの短い旅に出るにあたって、ただひとりの友達にだけ、ニューヨークでの滞在を知らせていた。彼女は、フォークナーの最後の恋人だった——当時、彼女はスイスに留学中の良家の子女だった——ことで知られている、いまは『グランド・ストリート』という高級な文芸誌を編集・発行していることでも知る人ぞ知るジーン・スタイン。（『ゆるやかな絆』60）

帰りによったニューヨークでの、古くからの友人が開いてくれたパーティーで——その友人は若い頃フォークナーと親しく、その前期のインタビューとして代表的なものを最初に活字にしたジーン・スタイン……（『ゆるやかな絆』115）

ジーン・スタインと大江が古くからの親しい友人だということを今回知り、フォークナー研究者として驚きを禁じ得なかった。スタインとフォークナーは、1953年のクリスマスに、スタイン19歳、フォークナー56歳で出会う。実に37歳の年齢差があるが、二人は恋人関係にな

り、およそ4年間その関係は続く。最後にはニューヨークで、スタインの方から別れを切り出したのだが、別れを告げられたフォークナーがランダムハウス社のオフィスでむせび泣き、それをたまたまトルーマン・カポーティが目撃するというアメリカ文学史の有名なエピソードを生み出した人物である。

高安カッチャンは、なお外国留学の機会がかぎられていたこの年に、しかも英文科に在学している学生の身分で、どのような手づるによるものか、アメリカに渡っていたのだった。それもかれは、その年からウィリアム・フォークナーがWriter-in-Residenceとしてヴァージニア大学に着任することを知っていたのであり、そこでのフォークナーの講義を聞くために渡米したというのである。そこでわれわれ同級生のうちには、その二年前に日本にきたフォークナーとじかに談判した高安カッチャンが、この高名な作家をつうじて渡米の糸口をつかんだという者もいた。（「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち」41-42）

大江の短編小説「^{レイン・ツリー}雨の木」を聴く女たち」からの引用である。ここに訪日中のフォークナーと会ったことがあるのではないかと推測される高安カッチャンという人物が登場する。この高安カッチャンはアルコール依存症の困った人物で、大江自身を思わせる「語り手」に嘘をつき、さんざん引きずり回す。この時期の大江は新しい様式の私小説に取り組んでいて、多くの登場人物に現実のモデルがいる。日本のフォークナー研究者のなかに高安カッチャンのモデルがいるのだろうか。

最後にもう一つ。女性作家の西村みゆきが1959年に「針のない時計」という小説で『婦人公論』の第二回女流新人賞を受賞したのだが、その「針のない時計」には盗作疑惑が浮上して受賞は取り消しになった。フォークナーの『サンクチュアリ』の盗作だと疑われたのだった。さて、小谷野敦の『江藤淳と大江健三郎』に、阿川弘之の証言として書

かれていることだが、芥川賞を受賞したすぐ後の頃に、大江がその西村みゆきを連れてバーに入ってきて、阿川たちとひと悶着起こしたのだそうである（小谷野 141-42）。また西村みゆきは、『万延元年のフットボール』が話題になっている頃、週刊誌に大江の恋人だと書かれたりもした人物である。大江と西村はひょっとしたらフォークナーについても話をしたかもしれない。

以上3つトリビアを紹介した。大江とフォークナーという取り合わせには、何かがありそうな雰囲気が漂う。

注2 1955年のフォークナー訪日の全体像については『ウィリアム・フォークナーの日本訪問——冷戦と文学のポリティクス』（相田洋明編著 松籟社 2022）参照。

引用文献

- 大江健三郎 「後記」 『見るまえに跳べ』 新潮社 251-52。
 ——— 「飼育」（1958） 『大江健三郎全小説1』 講談社 2018 123-57。
 ——— 「小説の神話宇宙に私を探す試み」『大江健三郎・再発見』（大江健三郎・すばる編集部編） 集英社 2001 11-43。
 ——— 『ゆるやかな絆』（1996） 講談社文庫 1999。
 ——— 「^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち」『^{レイン・ツリー}「雨の木」を聴く女たち』（1982） 新潮文庫 1986 33-79。
 ——— ・安岡章太郎 「われわれはなぜ書くか」（1966）『われわれはなぜ書くか 安岡章太郎対談集』 毎日新聞社 1975 5-67。
 大橋健三郎 『^{ヘッド}頭と^{ハート}心——日米の文学と近代——』 研究社 1987。
 小谷野敦 『江藤淳と大江健三郎 戦後日本の政治と文学』 ちくま文庫 2018。
 篠原茂 「読むための大江健三郎年譜」『大江健三郎・再発見』（大江健三郎・すばる編集部編） 集英社 2001 167-224。

柴田元幸（編著） 『『ハックルベリー・フィンの冒けん』をめぐる
冒けん』 研究社 2019。

フォークナー／高橋正雄訳 「赤い葉」『エミリーに薔薇を』 福武
文庫 1988 5-50。

Faulkner, William. "Red Leaves." *Collected Stories of William
Faulkner*. Random House, 1950, 313-41.

Napier, Susan J. *Escape from the Wasteland: Romanticism and
Realism in the Fiction of Mishima Yukio and Oe
Kenzaburo*. Harvard UP, 1996.

(大阪公立大学教授)